

台湾

東海大学  
留学に関する報告

高知大学  
総合人間自然科学研究科  
人文社会科学専攻

滞在期間 2011年9月～2012年2月

## ○滞在期間

2011年9月～2012年2月

## ○滞在场所

東海大学（台湾）

## ○感想

高知大学にて台湾の歴史について学んでいた私は、指導教員のすすめにより、中国語読解能力の向上と現地調査を目的とし、台湾に留学することとなった。私が卒業論文、修士論文ともに注目した場所は、台中市の南側に位置する彰化縣の鹿港というところである。派遣先の東海大学は、鹿港からバスで約一時間の距離にあり、比較的鹿港に近いことから留学先に選んだ。

これまで漢文や中国語を読むことは授業で行っていたが、実際の中国語会話についてはほとんど経験のない状態からのスタートであったため、出発前は不安でいっぱいだった。そんな私に対して台湾人のルームメイトは皆よくしてくれた。彼女たちとははじめ筆談や片言の英語でコミュニケーションをとっていたが、帰る頃には傍に紙とペンがなくても一応の会話をするできるようになった。

東海大学では留学生をサポートするバディという制度があり、そのバディが留学後に口座開設や携帯の手続きなどを手伝ってくれるようになっている。私の場合、バディは全く日本語が話せなかったが、この機会にと一生懸命日本語を勉強しようとしてくれたのがとてもうれしかった思い出がある。しかし実際の生活面でいつも私を助けてくれたのは、台湾人のルームメイトであった。東海大学の宿舎は4人一部屋で、私の場合私以外の三人はみな台湾人であった。彼女たちとコミュニケーションをとることで知らない単語を教えてもらったり、見たことのない食べ物をいただいたり、時には一緒に出かけたりして、まるで家族のように仲良くしてくれた。

彼女たちのサポートによって台湾での生活にひとまず慣れたところで、華語中心の授業がはじまった。はじめに中国語学習の経験年数によって大まかにクラスを分け、その後実際に授業を受けて、実力が合わないと感じる者たちは変更を申請するというシステムである。一クラス大体7人～10人で分けられ、初心者クラスは7人が普通であった。授業前に中国語のテストを受けるが、その点数とクラス分けはあまり関係なさそうだった。

私は初心者クラスに振り分けられたが、そのクラスはすでに夏期講習から授業をはじめていたため、最初の一ヶ月は授業についていくのが本当に大変だった。これまでの経験から読解能力は悪くなかったが、聴力と発音がよくなかったので、毎日発音練習を行い、中国語のラジオも聞き続けた。これらは帰国までほぼ毎日続けていたので、これからも続けて生きたい習慣のひとつである。

華語中心の授業以外に大学部の授業も履修することができたので、3つほど挑戦してみることにした。最大で5つ履修することができるが、中国語能力上級者でなければすべて履修すること

はとても大変なことであると思う。これらの履修方法は華語中心とは全く違い、この履修方法を調べるのがとても大変だった。多くの台湾人に見られるおおらかさゆえに、誰もはっきりとしたことを知らず、結局面識はないが日本語がうまいバディを頼ることにした。

大学の授業は日文科の授業を2つと共通教育の台湾の歴史についてというものを履修した。日文科の授業は両方とも日本人の先生だったが、そのうちのひとつは台湾の学生とグループになり、日本語話者と中国語話者の話し方の違いについてレポートを作成するものだった。日文科の学生とはいえ討論はいつも中国語だったため、中国語の練習にもなった。また言語学の授業をはじめて受けたので、歴史学とはまた違う研究方法と触れることができ勉強になったと感じている。

共通教育の歴史の授業では台湾の通史を学んだ。台湾人の先生だったため、授業はすべて中国語だったが、親身に相談にのっていただき、私の修士論文に関連する書籍などを紹介していただいた。また台湾の歴史を説明する上で朱印船について中国語で発表してもらえないかと言われ、片言ではあるが中国語での発表に挑戦させていただき、良い経験になったと思っている。

私は留学前からはじめの二ヶ月間は学内での勉強に専念し、その後台湾のいろいろな場所に積極的に出かけようと計画していた。実際に二ヶ月すぎたころには、聞き取りには自信がなかったが、自分の主張を通せるくらいにはなっていたので、この頃から積極的に一人旅に出かけるようになった。毎週土日は必ずどこかに行くようにし、修士論文で取り上げる予定である鹿港には合計4回ほど行った。またこのころ書籍や論文なども集め始めた。

留学前は鹿港そのものの構造に興味があったが、次第に鹿港を中心とする国内交通に興味をシフトしてきた。そのため思い切って鹿港と関連する王功港から鹿港までの14キロほどを一人で歩くことにした。合計で7時間ほど歩いたが、台湾の田舎の様子がよく分かったのもとても良かったと思う。台中や学内では中国語が主に使用されるが、田舎の方ではいまだ中国語が全く通じないことが多い。また台湾の小川や用水路はとても汚く、マスクがなければ傍を歩けないほどの悪臭がした。動物の死体などがそのまま放置されている場所もあり、きらきらとした都会だけでは感じられない台湾を見ることができた。修士論文に関連することとしては台中の平地の様子や、鹿港のそばにある旧鹿港溪を観察することができた。

1月のはじめに授業が終了してから、荷物を友人に預け、私は一人環島（台湾一周）に出かけた。期間としては10日弱だったが、この一人旅は本当に自分の人生の中でもよい経験だったと思う。学内での勉強、もしくは日本人と共に行く旅行では感じられないものがあり、それはうまく言葉にはできないが、やってよかったと思っている。

留学前、私は語学にはあまり興味がなく、歴史を勉強するために中国語を勉強しているというスタンスが自分の中でどこかにあったと思う。しかしはじめは辛かった中国語の勉強が、通じなかった悔しさや、通じた嬉しさによって私を夢中にさせ、気づけば一日中、中国語の勉強をしていたことも珍しくなかった。今回の留学を経験して、これから一生中国語を自分の楽しみとしていつでも勉強するつもりでいる。



台中の田舎で見た三輪車



環島で行った馬祖島



華語中心



台北、士林夜市